

〔儀式〕踐祚大嘗祭儀中

宮内官人率吉野國栖十二人、檜笛工十二人、並著青摺布衫入自朝堂院南左掖門就位奏古風○中其群官

初入、隼人發聲立定乃止、訖國栖奏古風五成○下

○按ズルニ、吉野國栖ノ神事節會等ノ時、歌笛ヲ奏シ、又御贄ヲ獻ズル事ハ、神祇部大嘗祭篇新嘗祭篇歲時部元日節會篇白馬節會篇踏歌節會篇等ニ載セ、又國栖歌ノ事ハ、樂舞部風俗歌篇

ニ載セタリ、參看スベシ、

〔延喜式三十一〕大齋○中

國栖十二人、笛工五人○中

凡諸節賜群官饗者、正月一日、十六日、九月九日等三節○中國栖笛工九月九日除大歌立歌人加文人正月七日、十

七日、五月五日、七月廿五日、十一月新嘗會等五節○中國栖笛工○中其食法見大膳大炊等式、

凡諸節會、吉野國栖獻御贄奏歌笛、每節以十七人爲定、國栖十二人、笛工五人、但笛其十一月新嘗會

各給祿有位調布二端、無位庸布二段、

〔日本紀略五〕安和元年正月一日乙酉、止宴會、依諒闇也○中吉野國栖所進菓子付内膳司、

〔日本紀略八〕寛和元年正月十六日辛酉、女踏歌、天皇出御南殿、國栖不參、

〔小右記〕寛弘八年正月一日乙亥、節會作法如恒○中無國栖奏、依不參上也、近年如之、是大和守賴親

時被調已不參上、

〔古事記傳三十三〕このほど○八寛弘より國栖人の參入て仕奉る事は絶たるなり、此後江次第、其

も、節會に、國栖於承明門外奏歌笛と記したるは、眞の國栖人に非ず、たゞ其まねびのみなり、公

事根源、元日節會條に、今の國栖の奏とて、歌をうたひ、笛を吹ならずは、吉野より年始めに參りた

ると云ふなり、近代年中行事細記、元日節會條云、次國栖奏、音取平調、また踏歌節會條云、國